

聖剣士ソフィア

悦楽の調教呪縛

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

小説 舞麗辞

挿絵 神奈月昇

序章	王国の聖騎士
第一章	王城陥落
第二章	調教開始
第三章	魔辱の姫君
第四章	奴隸誕生
終章	公開処刑

登場人物紹介

Characters



ソフィリア＝アーチェランド

辺境の王国に遣え、王立騎士団を率いている女剣士。“聖剣士”の称号を持つ剣豪。

ラナ

ソフィリアが遣える王国の王女。国王の一人娘。

レニー

“毒蛇”と呼ばれ、恐れられている凄腕の調教師。

第四章 奴隸誕生

「ソフィリア、起きなさい」

調教師の声で目を覚まさせられたブロンド騎士は、調教に疲弊した重たい肉体をだるそうに起こした。

落城から早十日。昨夜も遅くまで、姫君の御前で数多の牡を相手させられた。淫熱がまだ肉体を蝕んでいるのだろう、掌が熱く子宮がトクトクと鼓動しているのが分かる。昨日もたつぷりと男を吞まされた肛門は未だにヒリヒリと甘痺れを起こしていた。

霞む蒼眼を擦りながら牢獄の格子窓に視線をやるが、まだ空には月が星が瞬いている。

「なんだ……奴隸には休息も与えないのか」

主君たるラナ姫をこれ以上ないほど辱めた仇に殺気を孕んだ視線を向けて問い掛ける。姫はあのおぞましい処女喪失以来直接陵辱を受けはしなかったが、今も化け物にお腹の中を我が物顔で占拠されている。自分が調教を受けている間も、時折真っ赤にさせた顔を掌で覆い、脚を小刻みに震わせて小声で泣いているのを見たことがある。きっとあのスカートの中で、淫らな魔物が悪さをしているに違いなかった。

「ああら怖いこわい♪ 別に躰の時間じゃないわ。いきなりで悪いけどこれからお城を出るわよ」

突然告げられ蒼眼が一気に覚醒した。

「ど、どこへ連れて行く気だ？」

相手の真意を量りかね問いを重ねるが、

「秘密よ。早く着替えなさい」

また騎士の衣装を押しつけられ、それ以上の質問を許されない。不安に駆られながら渡された衣服に袖を通し、鎧を纏う。

「ふふふ、いつ見てもステキよ、ソフィリア♥ さあ行きましようか」

牢を出されると、調教師に引きずられるように地上へと続く長い階段を上り、城内を巡って中庭へと至る。そこで彼女を待っていたのは一台の豪華な馬車だった。馬車には何故か王国の紋章が刻まれている。

「さあさ、楽しい旅の出発よ」

パシッ！ 純白に包まれた巨尻を叩かれ乗車を促される。尻房に広がる甘い痺れが心地よく感ぜられ、すっかり被虐の快楽に爛れた己自身が悔しかった。

ほどなくして馬車は出発したが、通常城を出る際に使うはずの正門を通らず、城内でも知る者は数えるほどしかないはずの地下道へと駆け入ったことだ。

「上は囲まれているのよ。レジスタンスっていうのかしらねああいうの。一昨日辺りから城を取り囲んでそりゃもうすごい騒ぎよ？ もう王様も死んじやつてるってのにねえ」

調教師の告げる事実が蒼眼騎士を驚かせた。そうだ、城が落ちたとてまだこの国が落ち

たわけではない。自国民の気位の高さを今更ながら知らされた聖騎士は涙が出そうになる。「でも。でもよ？ そんな国民にとつて象徴的な存在が帝国の力の前で完膚なきまでに屈したらどうなると思う？ さしもの彼らの自尊心も潰えて反抗する心を奪われるんじゃないかしら。ましてや淫らに堕ちた国の英雄の姿を前にしたらねえ」

意味ありげに笑う毒婦の言葉に蒼い目が大きく見開かれた。

「そ……それがお前たちの……!!」

声が震えているのが自分でも分かる。

このためだったのだ。この数日来、彼女はずっと疑問に思っていた。団長とはいえ一介の騎士にすぎない自分を執拗に辱め奴隷調教を施してくるのは何故なのかと。レニーの私怨にしてはあまりにも過剰だとは思っていたが、全ては王国占拠の策謀の一環。牝奴隷と化した自分を晒し者に、祖国を精神的な崩壊へと至らしめるためだったのだ。

「ほんとは口止めされてただけだね。愛する国をボロボロにしちゃうって思いながらアへ顔晒すソフィリアちゃん、見てみたくなってねえ」

調教師が声を立てて笑う。

これは明らかに挑戦だった。毒婦は女騎士が抗うようにわざわざ仕向け、それを自身の調教で屈服させようとしているのだ。

「お前の、お前の思い通りになんか……」

この数日間幾度となく繰り返していた言葉、だが今の彼女にはその言葉を淀みなく言い

きることができなかった。思えば城を落とされてから、自分がこの調教師の思惑から逃れられたことなど終ぞなかつた。

（私はまんまとコイツの手管に墮ちて、今や精液がなくては生きていけない卑しい牝奴隷そのものじゃないか——！）

唇をわなわなと震わせている聖剣士をよそに、黒衣の女は星空を眺めている。

「いい夜だわ。フフ、満月がアタシを祝福しているみたい」

嫌味なほど煌々と照りつける月へと向かうように、馬車は夜の荒野を駆けて行った。

「私は、どうなるんだろう……」

ベッドの上に腰掛けたソフィリアが一人ごちる。闇を駆け抜けた馬車の行き着いた先は敵国の中枢、帝国の城内であつた。

要塞の如き城の中へと連れてこられた女騎士はまず、あの忌まわしい媚薬風呂に脚の爪先から頭の天辺までを浸からされた。隅から隅まで徹底的に洗われたうえ、今回など媚毒を原液のまま全身にたっぷり塗りと塗り込められてしまったのだ。

希釈してさえあれだけの猛威を振るつた淫毒を直接使われた効果たるや絶大で、風呂から上がる際湯で何度も身身体中を濯いだはずなのに肌が火傷したみたいにチリチリと疼き、身体中が微熱を孕んで気だるかつた。

レニーが替えを持ってきてきていたのだろうか、風呂から上げられた剣聖にはまたも彼女の

衣服一式と鎧を与えられた。もつとも、下穿きだけは与えられなかったのでパンツの下は何も穿いていない。地肌がじつとりと汗ばんでいるのも相まって、直に陰部や尻溝に食い込むタイトな布地の感触は、絶えず誰かに触られているようでなんとも居心地悪かった。

しかしそれ以上に、敵城にて騎士団の正装を纏うと虜囚としての辱めに余計胸が痛む。皇帝の寝室に連れてこられた彼女は最奥に置かれた巨大なベッドの上に座らされたのであった。

部屋の中には彼女の他には二人の見張り番のみ。ざつと見渡せば壁には絵画や豪華な織物に混じって装飾の施された剣が何本も掛けられている。

あれを奪って……などと考えを巡らせるも、あいにく両手は後ろ手に縛られていた。それでなくとも、淫毒に冒されてしまった自分に手だれと思しき男たちの相手ができるだろうか？ 抜け目ない調教師が見張っていないのも、それと分かっていることに違いない。

しばらく空虚な時間が過ぎた。ほんの数分か、あるいはもう何時間も経ったのか。

突然ガチャ、と鍵の外れる音が鳴り、戸がゆっくりと開かれ、レニーが姿を見せた。

「お待たせソフィリア、アタシがいなくて寂しかったでしょう？」

黒髪の調教師は上機嫌だった。軽く酒でも煽ったのか、いつもは白い頬をほんのりと色づかせ、鋭い瞳はいやらしいほどに潤んでいた。入れ替わるように見張りの兵が外へと出てゆく。

「誰がお前のことなど……」

淫熱に噎れた喉を搾って毒づくも、毒蛇女は口端をニンマリと歪める。

「そうね、アタシよりも会いたい人がいるのよね。ふふ、貴女の新しいご主人様を連れて来てあげたわよ」

そう言つて横に退く調教師、その背後から彼は現れた。

「お前が、ソフィリアⅡアーチェランドか」

静かで、それでいて部屋の隅々まで届く声。歳は三十後半といったところか。背の高い、がっしりとした体格の男は中年に差し掛かる直前の男性特有の力が全身に漲っている。

男は見るからに上等そうな黒衣を纏い、それを包み込むようなオーラの如き威圧感を放っていた。

黒衣の胸部に縫われた紋章と気圧されそうな威圧感、女騎士は一瞥するや彼が何者であるのか察した。

「皇帝・ゾイ……」

呻くような声でその名を言い当てる。しかし次の瞬間調教師の鞭が唸り、王国騎士の尻をぶった。

ピシヤッ!!

「ひうっ！」

臀部で弾ける痛悦に、剣聖が喘ぎにも似た悲鳴を上げる。

「皇帝様、でしょ？ 牝奴隷のくせに初対面からご主人様を呼び捨てだなんて、躡けたアタシの顔に泥を塗るつもりかいっ!？」

ビシッ！ ビシイッツ！！

「くうっ……うううっ……ひはああんっ！！」

苦悶の呻きが唇を割った。二度三度と尻たぶを打たれ、白桃がみるみる腫れて熱を持つ。
「レニー、それくらいにしておけ」

毒婦を制すると、皇帝はゆっくりと腰を折り敵国剣士の蒼い瞳を覗き込んできた。異性の視線、それを浴びただけで牡に飢えた牝肌がゾクッと震えたが、それでも負けじと睨み返してやる。

先王の急死後、この地を軍事国家へと作り替え常に隣国を脅かす大陸きつての暴君。目の前にいるのは自国のみならず、大陸の民にとつての天敵だった。

「なるほど、確かに噂通りの美貌だな。何よりこのレニーが調教してなお、これだけ俺を睨み返してくるその意志の強さが素晴らしいじゃあないか——なあ、王国の聖剣士よ」
宝石のように美しい蒼眼を見つめ続けながら敵皇が笑う。

「お前の好きになんか、させない……絶対に……させない……」

そう吐き捨てた女騎士だったが、その言葉に覇気はない。それは威嚇というよりむしろ自分に言い聞かせるための台詞だった。そうでもしないと牡を欲しがる貪欲な牝が、調教によって薄膜にまで削がれた理性を引き裂いて顔を出し、死をも凌ぐ痴態を曝け出してしまいかねない。

「ふふふ、そうか。あくまでこの俺を拒むか。では」

はむっ！ 皇帝の顔が更に急接近し、桃色の唇が奪われる。男の肉厚な唇が女の柔らかな唇を吸り、舌を吸い出されてしゃぶられる。

咄嗟のこととはいえ千載一遇の好機だった。差し入れられた肉蛭^{なめくじ}を一噛みすれば、この敵を絶命させられるやも知れない。そうなれば間違はなく処刑されるだろうが、敵国の将を道連れにできるなら——！！

前歯を思いきり噛み締めてやろうと顎に力を込めようとす。なのに、できなかった。唇を重ねられた刹那、舌を吸われたその瞬間に爆発的に広がる牝の悦びが、隷属の快感が、それを許してくれなかった。

紅い媚薬を原液のまま使われたせいに違いない。間近に嗅いだ牝の体臭だけで、ソフィリアの肢体は発情を加速度的に促されていた。

「ちゅっ…ずっ…んちゅっ…んむう…」

ぬるぬると舌に舌を絡まされ、唾液を塗り込むように愛撫される。味蕾が擦られるようなこそばゆさを伴う快感に桃舌がひくひく痙攣してしまう。

ちゅぷっ。牝舌をたっぷりと味わってからようやく敵皇が唇を解放した。ねっとり唾液の糸を引きながら、ゾイは邪悪に笑う。

「何ゆえお前は俺の舌を噛み切ろうとしない？」

悠然とした態度で問い詰められても答えることができない。身体は今の口腔愛撫と牝臭にすっかり欲情を催している。唇から垂れ下がる唾液を拭うこともできず、口端から垂ら

しながら睨み返すので精一杯だった。

「答えぬか。それとも答えられぬか……まあよい、天下に名を轟かす劍聖ソフィリアⅡア
ーチェランド。その肢体、存分に味わつてみたいと思うていたのだ！」

がばあつ！ 覆い被さるるようにベッドに押し倒される。締めつけるような抱擁に牝の肢
体がジンと痺れ、鼻腔を満たす牝のニオイに心臓が狂ったように脈を打ちまくった。

「あつ、んああうつ……」

男の手が背をさすり、腰を撫でる。それだけなのに、たったそれだけのことなのに桃色
の口が歪みはしたくない喘ぎを零してしまう。

「なんだ、お前は背中に悦びのツボがあるのか？ それともただの淫乱か？」

あまりの感度のよさに驚くように皇帝が問う。蔑むような言葉に下唇を噛み締め喘ぎを
殺す。しかし男の手はするりするりと背中を下り、たつぷりと肉の詰まった桃峰の丸みを
さすってくる。閉ざしたはずの唇がみるみる緩んでしまう。そこは、真にソフィリアの性
感帯だった。むにいつ、牝の無骨な指が柔桃にめり込むと堪らない喜びが生じて背面を無
数の虫が蠢くように擦った。

「んああうつ……はあつ、んつ……ふあつ、そこああんうつ、くすぐつはひいああつ……！」

ぎゅつ、むにゅうつ……パンツの上から尻房を鷲掴まれ乱暴に捏ねられる。

「ふふ、いい尻をしている。みっちり肉が詰まっていて、感度もなかなか見える。こ
ちらは後々たつぷりと可愛がつてやるとして……まずはここか」

鼻がぶつかるとい間近で敵国騎士の悔しそうな顔を眺めていた敵皇は、尻を擽る手をベッドと女体の間から引き抜いて上体を起こした。

皇帝の大きな掌が胸当てをまさぐり、やがて留め金を探り当てて外してくる。カキツ、小さな金属音と共に胸元を包む圧迫感が失われた。ゾイは外した胸当てを鎖骨の方にぐいと押し上げ、女騎士団長の胸部を曝け出す。

ふるっ、とシャツ一枚張りつかせただけの柔乳がスプーンで突いたプディングのようにたわむ。汗を吸い込んだ薄布はもはや牡の視姦から乳峰を護ることさえできず、乳球の丸みを余すことなく敵皇に見せつけてしまう。しかもその頂きには、生地を突き破らんばかりに隆起する乳突起の様子がはっきりと確認できた。

「もう乳を勃たせているな。やはり淫乱か」

虜囚の太腿に腰掛けた皇帝は、悠然と見下ろしながら乳房に手を伸ばす。仰向けになつてなお型崩れしない乳峰の裾から、そつと掬い上げるように柔肉が揉まれ始める。左右で対照的な弧を描くように乳肉が捏ねられ乱されると、怒濤のような乳悦が両胸の中心から渦のように生まれて柔肉を切なくさせ、息が詰まりそうだった。

「ちがつうっ…ううっ…はあっ、私イっあぁううっ、淫乱なんかじゃ…んつくう」

否定の言葉も淫声混じりではまるで説得力を持たない。皇帝は女の扱いに慣れていようで、それまで受けた牡兵どもの暴力的な愛撫とは違い、確実に快樂だけを引き出すような愛撫を施してくる。痛みが発するぎりぎりのところまで乳肉を鷲掴みにして乳芯から悦

楽を搾り出したかと思えば、微細な振動を与えるようにぶるぶると乳房を揺さぶって滲み出した乳悦を乳房全体に拡散させられる。自らの分泌した汗も手伝い、まるで直に乳肌をまさぐられているかのような錯覚に襲われた。

(ううっ、悔しいっ……相手はあの皇帝なのに……こんなことされて、よくなるなんて！)

牡手は決して焦ることなくじつくりと乳肉を揉みしだき、じわりじわり裾野から山頂へと指圧の重点を移してくる。それに連れて胸部全体を包むじんわりとした刺激も二点に収束するように鋭さを増して充血しきった乳先を疼かせた。

とうとう指が乳肉と乳輪の境、乳白色と桜色の狭間にまで迫り、女騎士は訪れるべき粘膜への淫悦に息を殺す。

「んう……くっ…………？」

だが、予想は見事裏切られた。皇帝の指はまるでそが折り返し地点でもあるように、またも乳裾野へと下っていったのだ。

雷撃のような凄まじい淫撃を覚悟していた蒼眼騎士はあっけに取られながらも、束の間とはいえあの恐ろしい乳悦を免れたことに安堵する。

しかし、彼女はすぐにそれが浅はかな考えであることを思い知らされた。二度、三度、乳肉を捏ねくられつつ指が乳峰を上昇下降を繰り返すと、乳肉に散らばっていた快楽の粒みたいなものが乳先になだれ込んでいく。胸先はいよいよもって赤く大きく膨らみ、ジンジンと疼いて止まらなくなる。

(む、胸が熱いっ!)

乳首へと火を放たれたような熱気に心が悲鳴を上げた。とどめを刺されればそこで終わる悦楽を放っておかれたらどうなるか——考えてもいないことだった。どこまでも蓄積させられる快感は発散することもままならず小粒な乳突起へと殺到し、にもかかわらず指一本触れられない乳豆は乳悦に弾け飛ぶことさえ許されない。

「あつはあああつ………いっいやつあ………!」

敵皇の前で、初めて弱音を漏らしてしまう。頭を振ったせいでプロンドの長髪が絹のシート上に流麗な模様を描いた。

「何が嫌なのだ? 胸を愛されるのがか? それとも——」

ゾイが顔面を乳峰へと寄せ、破裂寸前の乳豆目掛けてフツ、と息を吹きかける。

「んきゃあはううんっ!」

灼熱の吐息に舐められ、胸部が蕩けるような悦楽に蒼眼が牝鳴きした。

「ここを愛してもらえないことが、か。ハハ、お前の返事は喘ぎ声なのか?」

嘲笑するような問い掛け。答えるより先に無様なほど雄弁に語ってしまった己を恥じ入るように、虜囚騎士は朱色に染まった顔を背けて押し黙る。

「ふふ……可愛い奴だ」

ツンツ、人差し指の腹が乳先に触れた。

「ふうくううんっ……むっむねっが……バチバチしてえっ!」

ビリリッ！ 静電気にも似た刺すような乳悦が乳粘膜から解き放たれた。くりくりくりくり……指は絶妙な力加減で乳突起を転がし、胸先でいくつもの淫悦をスパークさせる。生まれた淫撃は乳房を鷲掴むようにして乳峰を覆い、両胸を弾けるような喜びに痺れさせた。

「よほど感度がいいようだな……王国の女は皆それほどまでに淫乱なのか？」

「なん、だつとおつ……」

祖国を侮辱するような敵皇の言葉に、誰よりも王国を愛する聖剣士は噛みついてやりた
い衝動に駆られる。しかし今上体を起こせば乳肉に男の指がめり込んでしまう。そんなこ
とになったら……更なる快感に怯んだ女騎士は身じろぎもろくにできず、ただゾイの冷た
い瞳を潤んだ目で睨み続けるくらいしかできない。

「違うのか？ ではこれくらいは平気だな？」

むにゅいつ!! 残酷な暴君は乳先を捏ねていた人差し指に力を込め、乳首を押し潰さん
ばかりに柔肉へとめり込ませる。

「んはあああうう！ ひあつ、ちくびいつ、それだめああつ!!」

胸板を乳悦の銃弾で撃ち抜かれたような衝撃が王国騎士を襲い、びくんびくんと身を仰
け反らせて喘ぐ。追い討ちを掛けるようにして、心の臓まで至るかと思われるほど深く突
き込まれた指先が、ぐりぐりと螺子を巻くように旋回を始めた。

「あひいつ、いやつめえろつ、やめろおつ！ もお指うごかすなあはうんつ!!」

普段の声色より一オクターブ高い乙女の鳴き声が広い部屋で何度も反響する。乳肉の奥で爆ぜる淫悦の凄まじさたるや、胸奥に埋め込まれた火薬を暴発させられたかのような指がぐりりと捻るたびに押し潰された乳突起がよりひしゃげ、乳峰の隅々にまで熱を孕んだ淫悦が駆け巡る。

更に皇帝は余った掌で再び乳房全体をたつぷりと揉み捏ね、乳快楽をより狂おしいものへと押し上げてくる。

「くくく、もつと頑張らぬか。このままでは胸だけで果てそうな勢いだぞ？」

敵皇の嘲るような叱咤。

「だ…誰がっ…っ…そんなあぁっ…はっ、はしたないイ…っマネえっ!!」

何とか喘ぎを殺して言い返してやる。皇帝の手で果てる、聖剣士の名を継ぐ者として、それは絶対に許されない。だが、そんな反抗も結局は男の加虐心を満たすだけだった。

「ふふ、せいぜいソフィリアアーチェランドの名に恥じぬよう気を張ることだ」

乳肉にめり込んだ指がようやく引き抜かれた。ぽよんつと乳先が瞬時に飛び出し元の隆々とした勃起をそそり立たせる。

無論これで終わったわけではない。男の指が鎖骨の辺りを覆っている胸当ての裏に潜り込む。指は女騎士の素肌に密着した上着の止め紐を摘むと、それを器用に解いてゆく。

するりと乾いた音を立てて紐の結び目が解かれるや否や、ふわっ、と胸元が軽くなる。心地よい浮遊感に浸る間もなく、皇帝によって胸元がはだけられてしまう。

曝け出された乳峰は仰向けの姿勢にもかかわらず全く型崩れを起こさず、お碗型の美麗な肉釣鐘を形成していた。敵の目に晒された乳峰はじんわりと汗ばんで淫靡に濡れ光り、先端の色づきは普段の数倍赤みが増している。乳輪もぷっくりといやらしく膨れ、乳首などは自分のものとは信じられないほど大きく育っていた。

「見れば見るほど……淫らな乳をしているな。これが騎士の持ち物か？」

目の前に現れた牝の象徴に、呆れたようにゾイが言う。

「だ、黙れ……あつ、やめいいいいいっつ!!」

何事か言い返そうとしたソフィリアだが、それより先に敵皇が動いた。顔を女騎士の胸元に埋め、勃起乳首へと吸いついたのだ。

ちゅむっ、ちゅううっ……出るはずのない母乳を吸い出そうとでもいうように、じつくりと時間を掛けて吸引される。乳腺に淫悦が走り、それを中心に乳峰内部で嵐のような喜悦が巻き上がる。乳果実の先端だけを吸われているのに、まるで乳房全体をしゃぶられているかのような錯覚が蒼眼騎士を支配した。

ねろおっ、舌が口内の乳突起を捕らえ、いやらしく絡みついてくる。

「ひやあつ！ んはっ、やめ、はうっ、ちくびい舐めるなあっつ!!」

乳豆を舌腹にくにくにくと転がされる。布越しの指責めよりも遙かにダイレクトな刺激が乳粘膜を魔悦に爛れさせ、ブロンド騎士の呼吸を乱しに乱す。

牡皇は乱れる女騎士の美貌を冷たい瞳で見据えつつ、啜え込む乳肉の容積を増してゆく。

はむっはむっ、と乳房の三割方を呑み込まれ、前歯でもって齧りつかれる。

「いたあうっ、ひっ、やあっああんっっ!!」

一転しての乱暴な扱いに苦痛の呻きを上げるも、被虐の悦びを教え込まれてしまった聖の肉体はぞくぞくするほどの悦楽を味わってしまう。

「んんふふふ、もう身体の方はすっかりマゾ奴隷に仕上がっているようだな」

満足げに笑い、また嘔みつかれる。かぶっ、乳房が食い千切られるかと思うくらい歯がめり込んで乳房をひしゃげさせると、痛悦としか形容できない被虐の快楽が食まれた左胸でカッと燃え上がった。

口で乳房を齧りながらも、皇帝の手はすると腹を撫でながら女体を下り、ベルトを飛び越えて牝腰にびっちり張りついたパンツへと届く。

「あっ、だめっやめろおおっ!!」

男の狙いに気づいた麗騎士は身を振らせ抵抗する。今触られたらまずい、今触られたら——！しかし抵抗空しく、敵皇の掌はぶっくりと膨らんだ恥丘をつつつ、と撫で擦りながら股の間に滑り落ち、布越しに秘所を探り当てる。

ふっ、と軽く掌が添えられると、じゅわっとパンツから蜜液が滲み出した。

(気づかれたっ!!)

聖剣士の頬が羞恥によって黒に近いほどの深紅に塗り上げられる。皇帝の執拗な責めに、戦乙女ははしたないほどの愛液を分泌してしまっていたのだ。

「あつはつは！ おいレニー、ソフィリアの奴めもう濡らしているぞ」

「あらやだ恥ずかしい！ アタシもそこまで変態に寝けた覚えはありませんわ」

悔しかった。乱暴されるだけなら我慢もできよう。しかしそれに悦びを感じてしまったうえ、淫悦に乱れた動かぬ証拠を握られてしまうなんて。敵二人による嘲弄に気丈な蒼眼が潤んだ。

「まったくしようのない奴だ。一体どんな卑猥な牝の穴を持っているのか」

よく育った乳房を味わい尽くした敵皇はそれまで座っていた女騎士の腿の上から退くと、彼女の膝裏を掴みぐいっと両脚を抱え上げた。すかさずふくらはぎを調教師が掴んで更に足を頭部の方へと引つ張ってくる。

「んあっ!？」

突然に窮屈な姿勢を取らされた剣聖はわけも分からず腰を掲げさせられてしまう。

「あらいいわねえ。ご主人様の前でまんぐり返しなんてしちゃって。すけべなおま○こしつかり見てもらえるわね♥」

頭の上から降りかかる調教師の声に首を上げて己の股座の方へと視線を向ける。天井を向かされた股間を覗き込むように皇帝の好色な顔があった。

(あ、あそこ、こんな間近で見られちゃってる……!!)

ベッドに背をつけたまま、腰だけを高く掲げる恥ずかしい姿勢。濡れそぼった股座はクロッチを張りつかせ、陰裂の筋がくつきりと浮き立っている。恥ずかしい牝突起までがは

つきりと透けて見えた。

「ふふすごいな……お前の股座、湯気が上がってるぞ」

鼻先が密着しそうな近さで淫華を鑑賞していた皇帝が驚嘆交じりに呟く。目を凝らせば確かに自分の股間が、まるで小水を漏らしたみたいにくっすらと湯気を燻らせているのが分かった。

「み、見るな……やだっ、みないで……みちゃ……や……」

立ち上る淫液の湯気を曝け出すのは、ある意味陰部を見られる以上に恥ずかしかった。しかし邪悪な皇帝はわざとそれを嗅ぐようにして深く息を吸い込んだ。

「いやらしい匂いだ。少し鼻につくが、小便も混じっているかも知れない」

勝手な決めつけで剣聖を更に貶めると、ゾイは懐から小さなナイフを取り出す。小型ながら寶石で彩られたそれを、今も淫気を立ち上らせる牝割れへと宛がう。

「ひっ……」

局部に刃の冷気を感じ、反射的に腰が引けた。しかしすぐに調教師が左右の腰骨をがちりと押さえつけ身動きできなくされてしまう。

「動くな、手元が狂う……」

皇帝は悪戯っ子のような笑みを浮かべながら刃を動かし、股布に一直線のラインを引いた。よほど上等な代物なのだろう。たったそれだけの動作で、ナイフは布地に引っ掛かることも音を立てることさえなく女騎士のパンツを切り裂いた。

くばつ、と薄生地が左右に割り開かれ、中から濡れ光る女陰が丸出しになる。むわつ、と辺り一面に牝の淫臭がたちこめる。軽く綻びかけた桜色の牝華はトロトロと透明な蜜に塗れ、周囲の柔肉で生い茂る黄金の叢はそれを吸い込み、べったりと恥丘に張りついていた。

下穿きを穿いていないことを今更ながら思い出させられた。籠もった熱気が発散され、蜜に濡れた女陰を外気が冷やす。

「ほう！ どんなふしだらなものを持っているのかと思えば、これはなんと美しい」

剥き出しの陰裂を前に敵皇は満足げに頷いた。指をそつと牝割れに近づけると、陰裂の左右に親指を置き、むにいつ、と牝口を割り開く。

曝け出された陰門は深い桃色をしており、全体が滲み出した愛液によってぬらぬらと妖しく淫靡に照り輝いている。女騎士の陰部は非常にはつきりとした造りで、包皮に包まれた陰核から少し縦長の尿道口、左右対称な小陰唇とそれに護られた楕円形の膣口までがまるで名のある彫刻家の作であるかのように美しい姿を見せていた。

「この美麗さであれば確認するまでもあるまいが……」

皇帝は更なる力を込めて恥裂を割り、膣を開口させる。むにゆいつ、と軽く内部の桃色肉を露出させた膣穴から、白みがかった処女膜が恥ずかしげに顔を覗かせた。

「ふふ、確かにまだ生娘のままか。レニー、未通の娘をよくぞここまで淫らに躰けたな」
屈辱の姿勢を強いられている女騎士を扶み対面している調教師に、皇帝が賞賛の声を掛



ける。

「ほほほ、お褒めに与りまして♪ まあ元々ソフィリア様に変態の素質がおありだったんですわ」

ひくひくと呼吸のたびに蠢く戦乙女の菊座をいやらしく眺めながら、毒婦が勝ち誇ったように笑った。

「ち、ちがうっ！ わたし変態なんかじゃ……」

敵の愚弄に我慢できずに女騎士が吠える。

だが、皇帝が戯れに陰核をピンッ！ と爪弾くと、

「はきやああんっ!! そこっ、だめだっっていつてるだろおおっもお触るなああっつ!!」

朗々とした美声は淫蕩に霞んで、盛った牝猫みたいな喘ぎと変わる。陰核を弾かれた衝撃は股間が爆ぜたかと思うほど。あれほど狂わされた乳突起での喜びが子供の遊びに思えてしまいうぐらいだった。

「変態め、ここがいいのか？ この肉芽が……」

無理やり剥き出しとされた麗騎士の陰門は、大陰唇の花弁いっぱいまで透明な牝蜜が溜まっている。皇帝は人差し指の先で、文字通り蜜壺と化した牝華から粘液を掬う。

ぬとおおっ、とどここまでも糸を引く透明の蜜液をたっぷりと指に絡ませ、すぐ傍で怯えるようにフードを被っている牝突起へと近づけ——押し潰さん勢いで揉み捏ねた。

くりゅっ！

「きゃあああつうう!! だめっ、お前なんかにつおまえなんかがいい——っ!!」
びくびくんっ! 凄まじい淫悦に女体が跳ねるようにのたうち、激しく牝鳴きしてしま
う。膣口が激しく収縮し、溜まりに溜まった淫液が水鉄砲よろしく噴き上がって皇帝の頬
を汚す。

「なんて礼儀知らずなんだいお前はっ!」

すかさず折檻しようとする調教師。

「くく、構わん。しかしこれは相当のスキモノだな……いい味だぞ」

敵皇はそれを制するとペろり、と頬を伝う酸味がかつた愛液を舐め邪淫の微笑を湛えた。
だが、そんな二人のやりとりも当のブロンド騎士にはもう意識の外であった。くりくり
と上下左右に押し潰され揉み上げられる肉豆の激感だけが、彼女にとっては今や世界の全
てであった。

「あつ、んはあうつ、いつ…んあはあつ!!」

触れられただけで肉体を一直線に閃光が駆け抜け、全神経が鋭い淫悦に麻痺してしまう。
指腹が陰核を押し上げれば肉体が頭の方へとせり上がり、下に押し込めば腰が抜けて尻を
落としそうになる。その様はまるでクリトリスを弄られ動く繰り人形。股間に芽生えた肉
芽の中に彼女の操縦装置があるかのようにだった。

陰核責めのもたらず鋭利な快感に蜜液はみるみる溢れ出し、今や陰門内に表面張力で留
まっているのがやっとのほどだった。

「またこれほどまでに溢れさせおつて……仕置が必要だな」

台詞とは裏腹に嬉しそうな声色でそう告げると、ゾイはそれまでも散々弄り倒していた牝突起にもう一本指を沿える。二本の指で陰核を挟み込むように摘むと、肉真珠を覆っている包皮を器用に剥き上げた。

「はにいいっ!? やっ、焼けちゃっ……んううっ……!!」

むきいっ。陰裂よりも透明感のある桃色の粒がつるりと顔を覗かせる。露出させられた肉豆は空気に触れただけで淫火に燃え上がり、小突起から放出された火柱が肉奥に続くその根元までを一閃した。肉悦が異物のように腹奥で絶えず鋭利な刺激を生み続け、膀胱の辺りが恥悦にジンジンと疼き鳴く。

牝騎士の剥き身は小豆ほどで、磨きたての硝子みたいにつるつるとした表面は宝石の如き美しさを湛えていた。とはいえその張りも丸みも大きさも、全ては淫皇の手淫による屈辱勃起の結果にすぎない。はちきれそうなほど張り詰めた肉豆は今にも独立した鼓動を始めるようなほど、末端にまで血液を巡らせ感度を最高潮にまで高めていた。

「さあて」

悪魔のような笑顔を浮かべた敵皇は、空いている方の手をゆつくりと曝け出された牝突起へと伸ばしてくる。

「や、やめろ……」

搾り出すような声でソフィリアが抗する。肉皮を隔てていてあそこまで激烈な快感をも

たらした陰核を、もし直に弄られたら――。

(狂う。私、きつと狂ってしまふ！ 皇帝相手に、この卑劣漢相手に――イっちゃう!!) 恐るべき悪戯から逃れようにも腰を押さえ込まれてはどうしようもない。わざとゆつくり近づいてくる悪魔の指先を、死刑の宣告を。女騎士はその蒼眼を見開いて凝視するしかなかった。

十インチ……五インチ……一インチ……!!

「ンギゃあはああうわああうつつ!! 腰がつ!! 跳ねるウウツウツ!!」

耳をつんざく大絶叫!! 裸のクリトリスを襲ったのは陰部を丸ごと食い千切られたような衝撃だった。しかし下半身に走るのは痛みではなく、それと同等の快楽であった。度を越した淫悦は激痛にも似た衝撃を神経に送り込み、股座が淫獄の烈火に包まれる。

「ふん、軽くイッたか。主人より先に自分だけ達すとは仕様のない牝奴隷だ」

姫口と尻穴を絶えず引くつかせる女騎士を見下しながら咬いた敵皇は、陰核から指を離す。女が見上げると、そこにはズボンから陰茎を取り出す皇帝の姿があった。

ゾイの牡根は既に充分硬く大きく屹立しており、太さ長さは並であったが反りが強い独特の形状をしていた。

「ひ……」

それを映し出した蒼眼は、喉笛を空気が逆流するような甲高い悲鳴を発する。今までに何十本と目にし唾えさせられた牝器官であったが、今回ばかりはわけが違う。相手は自国

を崩壊させた張本人たる皇帝であり、そのうえ今から自分の操を奪おうとしているのだ。
今の今まで腰を押さえ込んでいた調教師によつて今度は肩を掴まれ、起き上がりこぼしのように身を起こさせられる。すると丁度鼻先に、敵皇の龟头が触れた。

「唾えろ」

そそり立つ肉槍がを押しつけるように腰を突き出して皇帝が命じる。すぐ傍から香り立つ牡の臭いが鼻を掠め、血液を淫熱で沸騰させた。

唾えたかった。思いつきりしゃぶりついて狂おしい牡の味で味蕾を一杯にさせたかった。濃密な精を搾り出し、頭から浴びたくて仕方がない。

しかし相手は陛下の仇、祖国の敵。大陸に争いと混乱を招いている権化なのだ。

（やだ……こいつに傳く^{かしず}のだけは、絶対に嫌……!!）

騎士としての最後の誇りか。発情に流されそうになる女体を叱りつけ、自分を捕らえる邪淫の鎖を断ち切るように眼前のペニスから視線を逸らす。

「ほう、レニー、こやつ俺のものを拒みおったわ」

明らかに淫堕の誘惑と戦っているのが見て取れる女騎士の様子を楽しげに見下しつつツイが微笑した。

「まあ！ 牝犬の分際でご主人様の情けを無にするなんて!! 皇帝陛下お許しくださいね、この娘はとつても恥ずかしがり屋なんですわ。すぐに素直になるようにいたしますから♥」

芝居がかった口調でそう言いながら、毒蛇女は蒼眼騎士の股座にひよいと顔を潜り込

ませるや、丸出しの陰裂へ何の躊躇もなく顔を埋めた。

はむう！ 姫割れに、まるで欠けたパズルのピースがはまるかのようにびたりと入り込んだ毒婦の舌は、蕩けきっている女騎士の牝粘膜を削ぐように蠢き出した。

「ひはあんっ!? ひあめ吸うなあっ！　そこは舌だめええ——っつ!!」

腰で暴発を繰り返す女悦の前に、敵前であるのも忘れ腰をかくかくと前後に揺すり頭を振る。そのたびブロードの長髪が風にたなびくスカートの如くバサリバサリと舞い踊った。さすがは牝奴隷を躡けることを生業としていただけあって、その舌使いたるや妙技という他ない。女陰の勘所にべったりと張りついたかと思うと、舌腹のざらつきを利用して隅から隅までを一時に愛撫してくる。魔淫の鑢（すり）に磨かれるたび、秘裂のいたるところで火花のような淫撃が散った。

「こんなにぐちよぐちよにして。目の前のおちんちん、本当は啜えたいんでしょ？」
発情子宮に語りかけるように、毒婦が股座の間から囁く。

（おちんちん……すごい、美味しそう……）

理性は桃霞に閉ざされて牝の本能ばかりが研ぎ澄まされる。牝腰を蕩かせる百合責めの毒悦に、何とか保ってきた騎士としてのプライドが砂上の楼閣のように脆く崩れゆく。

舌が、勝手に口を割り開いて伸び始める。しかしお目当ての肉棒は舌を伸ばしきってもぎりぎり届かぬ距離にあり、耐えきれず飢えた犬のようにペロを垂らしたまま上体を迫り出して敵皇の股間に喰いついた。

はむんっ！ 長大な牡棒を半分以上口に含むと、味蕾がざわざわと騒ぎ出して唾液が湧き上がり、口腔を熱と蜜とで彩られた第二の女陰としてしまう。

「くはははは!! 見てみるレニー、この浅ましい女を！ こいつがああ剣聖ソフィリアアアーチェランドか？ 俺の一物を舐め回しているこの売女が!!」

ゾイの嘲りに胸がぎゅうぎゅうと締めつけられる思いだったが、それを遥かに凌駕する牡味の呪縛がはしたない行為を止めさせてくれない。

「はみゅっ……ちゅぷっ、ちゅむふうっ……ん………れるろっ、れるおおっ」

食道まで届くほど深く呑み込み裏筋に舌を這わせ、チロチロと舌先で舐め上げながらゆつくりと吐き出してゆく。赤く紅潮した頬がへこむくらい激しく牡根へと吸いつくその様は、年季の入った淫売のような淫靡な貫禄さえ漂わす。

「ちゅうう……んんんううっ……ちゅぶっみゅちゅっ、ふむうっ………」

劣情に駆られた牡の匂いにすっかり毒された麗騎士の意識は、脳髓が蒸発してしまっただかと思うほど虚ろになる。そんな中唯一はつきりしているのは目の前のペニスと、股間を舐る毒婦の舌が与える牝の悦びだけであった。

「はむふうっ、やひえ……ほれやはあつ、ほふはになめないれえっ！」

レニーの卑猥な悪戯に牝鳴きしながらも、口腔内の牡を吐き出すことはない。

股座を舐る調教師も次第に本腰を入れてくる。薄い陰唇を啄み横笛を吹くように左右に唇を這わせてくる。二枚のラヴィアを丹念に愛撫しつつ、濡れ舌でもって膣口をほじくる

ように突き回し、膣穴周りの筋肉をほぐし処女膜へと唾液を塗す。

微に入り細に渡る毒蛇女の女陰責め。入り口を責められた子宮が奥底でうずうずズギズギと疼き狂う。

昂ぶる疼きが最高潮に達さんとした頃合を見計らい、レニーがそれまで舌でも唇でも一切触れずにおいた肉真珠を啄み、ぢゆるるううっ!! と吸いついた。

「ふはあんあつ、ひやはあらあうんうう——っっ!!」

ズギイッ!! 陰核が爆ぜる激悦が股座で破裂し、肉体という入れ物から魂を吸い出されてしまうようなどうしようもない浮遊感が下腹に広がって腰骨を蕩かせる。

男根を零した聖剣士はどろりと白濁した唾液を撒き散らしながら咆哮を続ける。快樂の嵐が全身を巻き上げるように吹き荒れ、牝割れが小水のようにだくだくと愛蜜を垂れ流す。飲みきれないほどの牝汁にレニーの舌が何度も女陰を舐め上げ、更に加わる喜悦にピンクの菊座がキュウツと収縮した。

「はうっ、こっ、腰がああ……!?!」

今ですっかり腰が砕けてしまったソフィリアは膝立ちを維持できずに尻餅をついてしまふ。股座には当然顔面を埋める調教師が待ち構えている。ズンツ、と重桃を落とした結果自ら陰部を擦りつける形となってしまう、レニーの鼻先が陰核を潰す。

「ひきやうんっ!! ひやっ、だああっ!! もおそこはいやああああっ!!」

牝突起をくじられ、ブロンド騎士は美貌をシートに突っ伏し喘ぎ鳴く。肉豆で生じる電

光石火の激悦はそのまま女体深くに響き渡り、子宮奥の切なすぎる疼きを倍加させた。

これだけ凄まじい肉悦を与えられ続けているにもかかわらず、突き抜けるような絶頂にだけは決して至ることができない。先ほどのゾイによる乳按摩同様、卑劣な責め手の策謀により快楽を寸止めされているのに違いない。

(ひどい……これじゃ、本当に気が触れるううっ……)

ただただいたずらに快楽を女陰に送り込まれ、子宮の疼きを酷くさせられる。下腹部で無数の蟻が蠢いているようなどうしようもないもどかしさが絶えず剣聖を内から責め立てる。

まるで終わりのない肉の地獄。だがその疼きを癒す、恐らくは唯一の方法を女騎士は薄々感づいていた。すぐ目の前で己の唾液に濡れ光る男根。その劣情の肉杭で、疼き泣く己の股座に一撃をもらえばいいのだ。

(おちんちんほしい おちんちんほしい)

媚薬を浴びて男の相手をさせられるたび頭の中で反響していたいやらしい声。それが今は下腹部の深いところ、疼く子宮の奥底から聞こえてくるような気がした。

(ほしい ほしい ほしい ほしい ほしい——!!)

「ほ……ほしい……」

牝の本能による訴えをなぞるように、救国の騎士が唾液に濡れた唇を開いた。

「欲しい？ 何がだ？」

それまでレニーの巧みな責めに狂わされる敵国の英雄を觀賞していたゾイが満面の笑み

で問い返す。

一瞬、言葉が詰まる。爛れきった意識の片隅に、口を紡ぐように促す誰かがいるみたいだった。だが、そのぼんやりとした反抗心は濁流のような牝欲の前にすぐさまかき消された。

「お、おちんちん……欲しい……の」

震える唇が、はつきりとそう紡いだ。

「ふふふ……ならご主人様にその下品なくらい立派なお尻を差し出すのよ。わんわんみたく四つん這いになってね」

れるれると肉芽を舐っていた舌を引つ込めた毒婦は、王国騎士の桃尻を抱えて股座から抜け出す。ようやく陰核責めから解放された女騎士だったが、股間の疼きは全く収まる気配がない。心臓以上に力強く脈打つ牝突起が鼓動のたびに甘く切なく痺れた。

「と、これはもう要らないわね」

毒婦により両手の縛めがようやく解き放たれる。だが、王国の誇る聖剣士は既に外すことのできない肉欲の鎖に縛られていた。

「う……ううっ……」

ベッドのシート、自分の濡らした染みの上にソフィリアは重い尻をついた。だが、これが大陸全土の騎士から尊敬を集めた聖剣士の姿だと、誰が信じるだろうか。

傲慢のブロンドヘアはくしゃくしゃに乱れ、汗を吸って火を噴く勢いの頬にべったりと

張りついている。青空を思わせる澄んだ瞳は今や曇天のようにくすんで、彼女本来の意志の強さをまるで感じさせてはくれない。

乳釣鐘の上に乗せられた形の胸当ては持ち主を護るどころか、その重みで柔乳をひしゃげさせて圧迫し、潰された乳峰は破裂寸前の水風船の如く張り詰める。

下半身にびっちり張りつく白いズボンに汗と愛蜜を吸ったせいで地肌が透け、裸体以上に扇情的な衣装へと変貌を遂げていた。

挟り取られた股布からは周囲の白布と対を成すような紅い華がくちやりと咲いて蜜を噴き零し、荒い呼吸のそのたびに花卉が微細な開閉を見せていた。

自由を手に入れたはずの蒼眼騎士はしかし、逃げようとも争おうともしなかった。おぞおぞと身体を反転させ敵皇に背を向けると、顔をベッドに埋めるように上体を突っ伏し四つん這いの姿勢を取る。

レニーの唾液とそれを遥かに上回る愛液にドロドロと濡れた牝華がランプの明かりに露わとなる。張りのある桃房の谷間でひくつく肛門はまるで牡を待ち侘びているかのようにだつた。

「いい尻だ」

背後から近づいた敵皇は突き出された牝尻を数度弧を描くように撫で回す。ざわわつ、と尻肌を走る恥悦の粒子に、桃肌がパンツの上からでも分かるくらい栗立った。

一瞬間を置いて、淫裂にべちゃりと牡が張りつく。牝割れをなぞるように陰茎の腹がび

つたりと密着した。

挿入いられる！ 戦慄と期待に息を呑む。だが、敵はあまりにも陰湿だった。相手が今すぐにでも牡を啜え込まねばいられなくなっているのを知りながら、お預けを喰らわすように女陰を捏ねるだけ。

「んひいうぐうっ！ そんなあつ殺しようなっあはあんっつ!!」

卑劣な素股責めに女騎士はどうしようもないくらい切なくさせられ、蒼い瞳を涙で濡らしながら吠え喘ぐ。

「ふふふ、ならどうして欲しいのさ？ 俺に分かるように言ってみせろ」

悠々と女陰で己の一物を扱きながら皇帝が命じてくる。

(そんな……皇帝に、そんなこと……陛下の、仇相手になんて……)

力任せに犯されるならまだ自分への言い訳が立つ。だが、自ら強請ったのでは王国騎士として立つ瀬がない。自らの手で聖剣士としての矜持を碎けと、敵は迫っているのだ。

(ああ……でも、でもおっ……お腹のなかがつ……蕩けてえ……もう、もう……っ!!)

そうしている間にも女陰粘膜はぬちぬちと擦られ牝蜜を泡立てられる。熱い牡の凶器ぐつぐつと煮えくり返る子宮の疼きが、あれほど頑なだったプライドを溶解させた。

「……いつ、挿入いれてっ！ わたしのなかに……」

切迫した淫欲にほだされ、懇願してしまう。

「だめよソフィリア、牝奴隷がご主人様におねだりする時はね……」

毒婦がそつと耳打ちしてくる。それを耳にした美貌の騎士は形よい眉を八の字に歪ませ二の足を踏む。調教師に教え込まれた台詞はあまりにはしたくないものだった。

むにゆるつうつ、にゆるるううつ……敵皇の肉根が急ぎ立てるように陰裂を擦り上げる。股座を苛める牡の熱が喉奥から恥辱の言葉を引き出した。

「あひつ、ああううつ……ゾッ、ゾイさまっ！ このつ、大陸一すけべなソフィリアアア
ーチェランドの……お、おお……」

唇をふるふると震わせるが言葉が続かない。調教師に教えられた台詞にある女性器の蔑称を口走るのがあまりに恥ずかしく、つい言い淀んでしまう。

「聞こえんな……要らんのか」

肉棒がびたりと動きを止めてしまう。まるで空気を奪われたような急速な飢餓感が陰部より湧き上がって、いてもたってもいられない。

「お……おま……おまん………いっいやっ、言えないっつ!!」

恥辱にまたも言葉が途切れる。悪しき敵皇はそれを許容してはくれない。

「要らないんだな？」

念を押すような言葉、それを浴びた桃房がぶるつと震えた。肉華弁への圧迫が和らぐ。押しつけられていた剛直が離れようとしているのだ。

（いや——してもらえない、してもらえなくなる………そんなの、そんなのいやあつっ!!）
言葉をせき止めていた騎士の最後のプライドは粉微塵に打ち砕かれた。

「おまつ、おま○こですうっ!!」

全てをなげうち仇に浅ましい牝快楽を要求する。しかし敵はそれでもまだ許さない。
「ん、それがどうかしたのか?」

はぐらかすような物言い。どこまでも敵軍の将を貶め、辱め、弄ぶつもりなのだ。そして悲しいことに王国の聖騎士は、まんまとその手の上で恥ずかしく踊らされてしまう。

「いいひどいいっ…おま○こおつ、ソフィリアのすけべなおま○こゾイ様の遅しいおちんちんでめちやくちやにしてえええっつ!!」

悪漢の手管に墮ちた牝奴騎士は声の限りに叫びを上げた。王国騎士の浅ましい姿に皇帝は含み笑いを漏らしつつも、戯れに肉割れを擦り続ける。

ぬちっ、ぬちっ、ぬちゅっくちゅるっ!

「んにゃめっ、もういやらあつっ! 挿入いれてっ、早くいれてっばああつ!!」

もはやプロンドの牝騎士を支配しているのは脳髄ではなく子宮の疼きだけだった。ペニスを欲する牝の本能が女体を操り、触れ合う牡器官を欲しがるように牝尻をくんつくんと上下に揺さぶった。

「そこまでして俺のものを欲するか。ならば俺の奴隷として生きると誓え」

恥辱的な奴隷の強制。王国の騎士であることを捨てろという敵の言葉にも、一匹の牝にまで墮ちた救国の騎士は淫蕩に緩んだ顔を歪ませ、

「はひっ! 誓いますうっ! ソフィリアはゾイ様の奴隷ですっ、だっからああんっ♥

はやくおちんちんっおちんぽおっっ!!」

墮ちた英雄は遂に敵皇に向かつて従属の契りを交わしてしまふ。皇帝は笑いを抑えきれずにカラカラと笑い、亀頭の先端を姫口へと押しつけた。くちやり、と陰裂が亀頭を啜え込む。

「お前が動いて挿入れる……自ら俺に操を捧げるがよい」

もうその命令を拒むだけの意思は牝騎士の中に存在していなかった。

「はっ、はいっ……♡」

やっど挿入^いれてもらえ、淫欲に目が眩んだ牝は突き上げた尻をぐいっど背後に押しつけ、陰茎を呑み込んでゆく。

ぐぬゆっ、柔らかな突っかかりが膣道の最中で亀頭を押し戻す。神聖な器官を護るそれが今の彼女には煩わしいものにしか思えない。尻を思いつきり突き出し、牡腰へと叩きつける。ぶちっ、と若葉を引き千切った時のような音をソフィリアは確かに聞いた。

ずぶるるるぐぶう——っっ!!

「ふきやはあんつつ♡挿入^{はい}ってるっ! 硬いのいっばいはいつてきてるううっっ!!」

自ら処女を捧げた牝騎士が獣のように咆哮する。ペニスを根元まで呑み込んだ尻房は敵皇の下腹に完全に密着していた。股座から喉元までが一気に刺し貫かれたような錯覚。亀頭に子宮の入り口を激しく打たれ、疼きが爆ぜて牝腰を砕く。淫毒にたぶらかされた奴隷騎士の心は、まるで積年の思い人に操を捧げたような偽りの充足感に満たされる。

「おま○このなかつ、なかがああ♡おっ、おちんちん硬いの擦れてえっ、きっ気持ちい

亀頭のエラが膣口を撫でるところで腰を落とす、また深く牡を呑み込む。処女であった聖剣士は自分での体験はもちろんのこと他人の性交さえ見たことはない。だが、女体の奥に眠っていた牝の本能が腰の使い方を、牡肉の抜き方を知っていた。

くぶっくぶっぬぶっずぶるう！ 尻を振る速度も次第に速まり、女陰で溢れ出る恥液が皇帝の下腹部に撒き散らされる。

「ふふ、よかつたわねソフィ、ご主人様に大切な初めてあげられて。まだ教えてもないのに腰まで使っちゃって……ホントいい子ね、ご褒美あげちゃおうかしら」

大の字に寝る皇帝の両脚の間に手を突き尻を振りたくるかつての英雄へと毒婦が近づくと、腰を上下させるごとに激しく揺れる乳肉へと顔を伸ばし、果実を狙う蛇のように舌を這わせた。

「んふうひあああうっつ!! おっぱいびくびくつてしてえっ弾けっそおおつつ!!」

跳ねる乳峰の先端で瞬く乳悦に、壊れたように吠える。毒蛇女はネロネロと乳首を舐め転がし廻りつつ、掌をそろりと牝騎士の腰に回してむっちりとした桃割れを狙う。

ぬぶうっ……抽送を繰り返す陰裂のすぐ上で肉棒が出入りするたびにひくひくと淫らな開閉を繰り返していた菊座に、魔女の指先が潜り込んだ。

「はっ!? ひいやうわあっ!? おしりだめっ!? 今はおしりだめええ——っつ!!」

すっかり開発され尽くしている直腸をほじくられる肛悦は、前門を抉る牡にさえ匹敵した。一方で身を焼かれそうな悦楽を二穴で一時に与えられて、狂悦のあまり泣き出して

しまう。

「何言ってるのよ。ソフィリアちゃんはお尻の穴が一番気持ちいいんでしょ？」

中指と薬指、二本の指を根元まで潜り込ませた調教師は上目遣いに意地悪く笑いながら
手首をぐりぐりと旋回させ肛門を犯す。

「くはは、いいぞレニー。尻を抉られてこちらの方も締まりがよくなりおったわ！」

悠然と横たわって膺奉仕を受けるゾイが満足げに頷き、自らも腰を突き上げ始めた。

主君の賞賛を浴びた調教師は蒼眼の奴隷を更なる魔悦にのめり込ませようと指を鉤のように
途中で曲げ、牝腰を誘導するように上下に揺さぶり出す。

「きゃあうあはああつ!? そんっあはっ、やひっ……はやすぎいいいいっ!!」

それまでの数倍の速度で腰を使わされる羽目となった牝奴隷は激しすぎる淫悦の連打に
麗しい金糸を振り乱して喘ぎ狂う。子宮が暴走した炉のように快楽の火を女体を奥から燃
え広がらせ、直腸内から生み出される恥悦の痺れは全身の牝肌を麻痺させた。

「くく、いいのかソフィリア? お前は敵に犯されているのだぞ?」

皇帝が腰を押さえつけ、腰の運動を止めて問い掛ける。

「ひいっ!! いいっ、気持ちいいでうっ、だからやめないでええっ!!」

イヤイヤをするように長髪を振り乱して甘い匂いの汗を撒き散らし、腰をのの字にグラ
インドさせて少しでも快楽を貪ろうとする。

「ふふ、そんなに腰を振りたいか? 変態騎士め……させてやってもいいが、俺はもう我

慢できぬ。腔内なかで射精だすがよいか？」

問い掛けの意味が分からない。とにかく同意すれば気持ちいいのを続けてもらえる……その一心で、

「いいっ、いいからはやくっ♥」

甘い牝声で懇願し続ける。

「ん、本当にいいのか？ 孕むかも知れんぞ、俺の子を……仇の子を！」

孕む、その恐ろしい言葉の意味さえ思い出せない。欲しいのは更なる快楽、肉の悦び。そしてあの熱い牡の精液だけだ。

「赤ちゃんできちゃうかもってよ？ どうするソフィ？」

問いながら調教師はくちくちと尻穴を掘り起こす。尾骨から背骨までをこそがれるような摩擦の淫撃。排泄孔を擦り上げられる肛悦が牝騎士の臙な脳内を完全に邪淫で閉ざした。

「いいんっ♥ 赤ちゃんできてもいいひいいいっ!! だかつ、はやくうんっ♥ わたしのおま○こに精液イっ、いっばいいいっばいくださいいいいいいっ!!」

くくく、と皇帝は笑い、手を離し腰を思いきり使い出す。

ずぶっずぶっんっずぶるっずぶるっ!!

解放された牝奴は狂ったように巨尻を振りたくり、一気に悦楽の頂点へと上り詰めてゆく。

「くっ、射精だすぞ！ ソフィリア、お前の腔内なかにたっぷりと射精してやるぞ!!」



牡腰がズンッ!! と一際激しく打ちつけられる。子宮を押し潰さんばかりの衝撃、同時に毒婦の指が百八十度旋回して桃穴を抉り抜き、牝騎士も一気に飛翔へと導かれた。

「ひきやああはああうぐうつつ!! くうっ、イクッ、イぐうううう〜つつ♥」

どびゅっ!! どくっどくっどくっどくんっ……胎内で脈打つ牡の脈動と吹き上がる子種汁の水圧を膣内いっばいに感じながらブロンド奴隷が咆哮する。

「あひいつ♥ ひあはあああああううっんっ♥ あひいあはああああ……」

何もかもを洗い流すような快楽の津波が牝騎士を呑み込んだ。悦楽のあまり頭の中は錯乱し、眼前が暗転する。開いた口はだらしなない喘ぎを延々と漏らし続け、制御を失った女体はひくひくんっ、と際限なく痙攣し続ける。

「ふひいつおっばいっ……おっばいのさきイうくっ、ビクビクっしてっええううっ……」

執拗な愛撫により身体中に張り巡らされた淫悦の導火線に一齐に火を点けられ、快楽は乳腺を掛け巡って両胸を焼ききり乳先が弾けた。

「んおあああやおおんっ……お尻のっなかのおっはっさけっ……るふう!!」

直腸内部でも怒濤のような肛悦が炸裂し、ぶびゆるびいっ!! と下品極まる粘音を響かせ腸液が噴出した。

「ふう………いい味だったぞ、ソフィリア。俺の卑しい牝犬よ」

皇帝が勝ち誇ったように告げながら身を起こし、奴隷騎士を無理やり振り向かせてその唇を奪った。

「はみゆうっ♥……………はやあ……………」

絶頂に夜空まで打ち上げられた蒼眼騎士は自分を取り戻すことができず、惚けたまま口腔内を掻き混ぜられる。身体中が蒸し風呂にいるみたいに火照りきつてすこぶる熱かった。

「よくできたわねソフィ。ご主人様におま○こ中出しまでしてもらっちゃって♥可愛い赤ちゃん産みましようねえ」

腸液に塗れた指先を舐めながら毒婦が囁く。脳髓がジンジンと痺れきり思考がよくまとまらない。ただ、断片的な出来事が頭の周りをぐるぐると駆け巡る。

敵皇に操を捧げてしまったこと——何度も隷属の忠言を口にしてしまったこと——敵の精に神聖な器官を汚されてしまったこと。何より、それら全てを快樂欲しさに自ら望んでしまった——あまつさえ、仇の子を孕んでしまいかも知れない——。

「あつ……………うあつ……………ふえつぐつ……………うええええうつ……………!!」

美しくも淫らな聖剣士は敵皇の腕の中で嗚咽を漏らし泣きじゃくる。芯まで蕩かされた頭では何が悲しいのかも分からなかったが、心臓を鷲掴みにされたような息苦しさと絶望が胸を押し潰し、とにかく涙を流さずにはいられなかった。

——限界だった。最後の拠り所だった王国騎士としての誇りを自分の手で粉々にしてしまった牝奴隷は、敵の嘲りの中でただただ泣き喚き続けるしかなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>